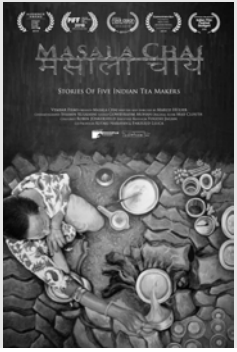
『マサラチャイ』（ノーカット完全版）

監督：マルコ・ヒュルサー

2017年／インド／75分



公式サイト

アジアンドキュメンタリーズ配信作品

社会を旅する
シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

インドから考える家族と社会の切り離せない関係

アーヤ藍

5月15日は国際家族デーだ。プライベートなものに思える「家族」だが、国連がわざわざ名を冠した日をつくるほど、社会と密接につながり影響し合っている。本作もまさに家族と社会の切り分けられなさを深く感じた作品だ。インドの人たちにとって欠かせないマサラチャイをつくる、多様な地域、年代、バックグラウンドの5人を追ったドキュメンタリーだ。

10代後半のグーリは父親のマサラチャイのお店を手伝っている。せっかちな父親と違い、彼女は味にこだわる。チャイの話をしているときの彼女は自信に満ちて見える。だが幼い頃は人が道端に捨てた食べ物を拾って食べていたほど、彼女の家庭は貧しかった。その時代をふり返りグーリと兄は「子だくさんは良くない。お金がないのになぜ子どもをつくるんだ？」と訴える。そんな彼女ももうすぐ「適齢期」だが、お見合いをし持参金を払って結婚した姉たちと違い、「すぐ結婚したくないし、仕事をもちたい」と話す。自由になりたいし、自分の未来を築きたいと。

一方、学生時代に出会った男性と半年で結婚を決めたスシャンタは、幼い娘を育てながらチャイ屋を営む。「私に人生の目標はない。前は夢があったけど、今は忘れちゃった」と話す彼女は、自分自身の自由を求めていない。だがそれは娘のためにすべてを注ぎたいからだ。その彼女も違う方面では自由を求めている。彼女が結婚した相手は自分より低いカーストだった。親戚からはいまだに白い目で見られ、嫌味を言われるという。教育水準が上がり、国は進歩しているのに、カーストや宗教の壁が残り続けることにスシャンタは疑問を呈する。

そんな自分のこと以上に娘や夫を想うスシャンタがいる一方、10歳の頃から村の家族と離れ、首都デリーでチャイをつくってきたスボートは、かつて4日間何も食べられない日が続き、母方の叔父を頼ったところ「自分で稼げ」と追い返された。「そのときお金がすべてだと悟った」と語るスボートだが、彼は今、かつての自分のように家族に頼れない少年たちを自分の店で何人も雇い、彼らの居場所をつくっている。

ほかの2人も含め、「家族」に対する愛情も葛藤も実に多様で、中には相対する考えもあり、家族に「正解」がないことを改めて感じる。同時に、どの悩みも特定の家族に閉じた問題ではなく、社会的通念や環境によるものであることもわかる。そして私は観ながら「日本でも近いことがあるな」と感じることの連続だった。お見合いを強制されることはないが、「結婚していて当たり前」の空気は地方でよく感じる。カーストはないものの国籍や宗教の違いで結婚に壁を感じる友人の声も聞いたことがある。インドの文化や慣習を味わえるとともに、日本の「家族と社会」を考えるヒントもきっと見つかる作品だ。

あーやあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル（株）に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』（春眠舎）。